

# 前

## 入学試験問題

### 国語（文科）

（配点一二〇点）

平成三十年二月二十五日 九時三〇分～一二時

#### 注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で二十二ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号（表面二箇所、裏面一箇所）、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用にも使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 十、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。



草稿用紙  
(切り離さないで用いよ。)

## 第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

余りに単純で身もフタ<sup>a</sup>もない話ですが、過去は知覚的に見ることも、聞くことも、触ることもできず、ただ想起することができただけです。その体験的過去における「想起」に当たるものが、歴史的過去においては「物語り行為」であるというのが僕の主張にほかなりません。つまり、過去は知覚できないがゆえに、その「実在」を確証するためには、想起や物語り行為をもとにした「探究」の手続き、すなわち発掘や史料批判といった作業が不可欠なのです。

そこで、過去と同様に知覚できないにも拘らず<sup>かかわ</sup>、われわれがその「実在」を確信して疑われないものを取り上げましょう。それはミクロ物理学の対象、すなわち素粒子です。電子や陽子や中性子を見たり、触ったりすることはどんなに優秀な物理学者にもできません。素粒子には質量やエネルギーやスピンはありますが、色も形も味も匂いもないからです。われわれが見ることができるのは、霧箱や泡箱によって捉えられた素粒子の飛跡にすぎません。それらは荷電粒子が通過してできた水滴や泡、すなわちミクロな粒子の運動のマクロな「痕跡」です。その痕跡が素粒子の「実在」を示す証拠であることを保証しているのは、量子力学を基盤とする現代の物理学理論にほかなりません。その意味では、素粒子の「実在」の意味は直接的な観察によってではなく、間接的証拠を支えている物理学理論によって与えられていると言うことができます。逆に、物理学理論の支えと実験的証拠の裏づけなしに物理学者が「電子」なる新粒子の存在を主張したとしても、それが実在するとは誰も考えませんし、だいたい根拠が明示されなければ検証や反証のしようがありません。ですから、素粒子が「実在」することは背景となる物理学理論のネットワークと不即不離なのであり、それらから独立に存在主張を行うことは意味をなしません。

科学哲学では、このように直接的に観察できない対象のことを「理論的存在(theoretical entity)」ないしは「理論的構成体

(Theoretical construct)と呼んでいます。むろん理論的存在と言っても「理論的虚構」という意味はまったく含まれていないことに注意してください。それは知覚的に観察できないというだけで、れっきとした「存在」であり、少なくとも現在のところ素粒子のような理論的存在の実在性を疑う人はおりません。しかし、その「実在」を確かめるためには、サイクロトロンを始めとする巨大な実験装置と一連の理論的手続きが要求されます。ですから、見聞臭触によって知覚的に観察可能なものだけが「実在」という狭きょうがい隘な実証主義は捨て去らねばなりません。他方でその「実在」の意味は理論的「探究」の手続きと表裏一体のものであることにも留意せねばなりません。

以上の話から、物理学に見られるような理論的「探究」の手続きが、「物理的事実」のみならず「歴史的事実」を確定するためにも不可欠であることにお気づきになったと思います。そもそも「歴史(History)」の原義が「探究」であったことを思い出してください。歴史的事実は過去のものであり、もはや知覚的に見たり聞いたりすることはできませんので、その「実在」を主張するためには、直接間接の証拠が必要とされます。また、歴史学においては史料批判や年代測定など一連の理論的手続きが要求されることもご存じのとおりです。その意味で、歴史的事実を一種の「理論的存在」として特徴づけることは、抵抗感はあるでしょうが、それほど乱暴な議論ではありません。

実際ポーは、『歴史主義の貧困』の中で「社会科学の大部分の対象は、すべてではないにせよ、抽象的对象であり、それらは理論的構成体なのである(ある人々には奇妙に聞こえようが、「戦争」や「軍隊」ですら抽象的概念である。具体的なもの、殺される多くの人々であり、あるいは制服を着た男女等々である)」と述べています。同じことは、当然ながら歴史学にも当てはまります。歴史記述の対象は「もの」ではなく「こと」、すなわち個々の「事物」ではなく、関係の糸で結ばれた「事件」や「出来事」だからです。「戦争」や「軍隊」と同様に、「フランス革命」や「明治維新」が抽象的概念であり、それらが「知覚」ではなく、「思考」の対象であることは、さほど抵抗なく納得していただけるのではないかと思います。

「理論的存在」と言っても、ミクロ物理学と歴史学とは分野が少々かけ離れすぎておりますので、もつと身近なところ、歴史学のリンゼツ分野である地理学から例をとりましょう。われわれは富士山や地中海をもちろんだ目で見ることはできますが、同じ地球

上に存在するものでも、「赤道」や「日付変更線」を見ることはできません。確かに地図の上には赤い線が引いてありますが、太平洋を航行する船の上からも赤道を知覚的に捉えることは不可能です。しかし、船や飛行機で赤道や日付変更線を「通過」することは可能ですから、その意味ではそれらは確かに地球上に「実在」しています。その「通過」を、われわれは目ではなく六分儀などの「計器」によつて確認します。計器による計測を支えているのは、地理学や天文学の「理論」にほかなりません。ですから赤道や日付変更線は、直接に知覚することはできませんが、地理学の理論によつてその「実在」を保証された「理論的存在」と言うことができます。この「理論」を「物語り」と呼び換えるならば、われわれは歴史的存在論へと一歩足を踏み入れることとなります。

具体的な例を挙げましょう。仙台から平泉へ向かう国道四号線の近くに「衣川の古戦場」があります。ご承知のように、前九年の役や後三年の役の戦場となつた場所です。僕も行ったことがありますが、現在目に見えるのは草や樹木の生い茂つた何もないただの野原にすぎません。しかし、この場所で行われた安倍貞任と源義家の戦いがかつて「実在」したことをわれわれは疑いません。その確信は、言うまでもなく『陸奥話記』や『古今著聞集』をはじめとする文書史料の記述や『前九年合戦絵巻』などの絵画資料、あるいは武具や人骨などの発掘物に関する調査など、すなわち「物語り」のネットワークに支えられています。このネットワークから独立に「前九年の役」を同定することはできません。それは物語りを超越した理想的年代記作者、すなわち「神の視点」を要請することにほかならないからです。だいたい「前九年の役」というコシヨウそのものが、すでに一定の「物語り」のコンテキストを前提としています。つまり「前九年の役」という歴史的存在事はいわば「物語り」な存在なのであり、その存在性格は認識論的に見れば、素粒子や赤道などの「理論的存在」と異なるところはありません。言い換えれば、歴史的出来事の存在は「理論内在的」あるいは「物語り内在的」なのであり、フィクションといつた誤解をあらかじめ防止しておくならば、それを「物語りの存在」と呼ぶこともできます。

(野家啓一『歴史を哲学する——七日間の集中講義』による)

[注]

○霧箱——水やアルコールの蒸気で過飽和の気体の中を荷電粒子が通過するとき、進路に沿って発生する霧滴によって、粒子の飛跡を観測する装置。

○泡箱——沸点以上に加熱された液体の中を荷電粒子が通過するとき、進路に沿って発生する微小な気泡によって、粒子の飛跡を観測する装置。

○サイクロトロン——荷電粒子を加速する円形の装置。原子核の人工破壊や放射性同位体の製造に利用する。

○ポパー——Karl Raimund Popper(一九〇二〜一九九四)。イギリスの哲学者。

○六分儀——天体などの目標物の高度や角度を計測する器具。外洋を航行するとき現在地を知るために用いる。

○安倍貞任——平安時代中期の武将(？〜一〇六二)。

○『陸奥話記』——平安時代後期に書かれた軍記。

設問

(一) 「その痕跡が素粒子の『実在』を示す証拠であることを保証しているのは、量子力学を基盤とする現代の物理学理論にほかなりません」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(二) 「『理論的虚構』という意味はまったく含まれていない」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「『フランス革命』や『明治維新』が抽象的概念であり、それらが『知覚』ではなく、『思考』の対象であること」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

(四) 「歴史的出来事の存在は『理論内在的』あるいは『物語り内在的』なのであり、フィクションといった誤解をあらかじめ防止しておくならば、それを『物語りの存在』と呼ぶこともできます」(傍線部エ)とあるが、「歴史的出来事の存在」はなぜ「物語りの存在」といえるのか、本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(五) 傍線 a・b・c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a フタ    b リンセツ    c コシヨウ





## 第二 二 問

次の文章は『太平記』の一節である。美しい女房の評判を聞いた武藏守高師直は、侍従の局に仲立ちを依頼したが、すでに人妻となつている女房は困惑するばかりであつた。これを読んで、後の設問に答えよ。

侍従歸りて、「かくこそ」と語りければ、武藏守いと心を空に成して、「たび重ならば情けに弱ることもこそあれ、文をやりてみばや」とて、兼好と言ひける能書の遁世者をよび寄せて、紅葉襲の薄様の、取る手も燻ゆるばかりに焦がれたるに、言葉を尽くしてぞ聞こえける。返事遅しと待つところに、使ひ歸り来て、「御文をば手に取りながら、あけてだに見たまはず、庭に捨てられたるを、人目にかけてと、懐に入れ歸りまゐつて候ひぬる」と語りければ、師直大きに氣を損じて、「いやいや物の用に立たぬものは手書きなりけり。今日よりその兼好法師、これへ寄すべからず」とぞ怒りける。

かかるところに薬師寺次郎左衛門公義、所用の事有りて、ふとさし出でたり。師直かたはらへ招いて、「ここに、文をやれども取つても見ず、けしからぬ程に気色つれなき女房のありけるをば、いかがすべき」とうち笑ひければ、公義「人皆岩木ならねば、いかなる女房も、慕ふに靡かぬ者や候ふべき。今一度御文を遣はされて御覽候へ」とて、師直に代はつて文を書きけるが、なかなか言葉はなくて、

返すさへ手や触れけんと思ふに、ぞわが文ながらうちも置かれず

押し返して、仲立ちこの文を持ちて行きたるに、女房いかと思ひけん、歌を見て顔うちあかめ、袖に入れて立ちけるを、仲立ちさへはたよりあしからずと、袖をひかへて、「さて御返事はいかに」と申しければ、「重きが上の小夜衣」とばかり言ひ捨てて、内へ紛れ入りぬ。暫くあれば、使ひ急ぎ歸つて、「かくこそ候ひつれ」と語るに、師直うれしげにうち案じて、やがて薬師寺をよび寄せ、「この女房の返事に、『重きが上の小夜衣』と言ひ捨てて立たれけると仲立ちの申すは、衣・小袖をととのへて送れとにや。そ

の事ならば、いかなる装束なりとも仕立てんずるに、いと安かるべし。これは何と言ふ心ぞ」と問はれければ、公義「いやこれはさやうの心にては候はず、新古今の十戒の歌に、

さなきだに重きが上の小夜衣わがつまならぬつまな重ねぞ

と言ふ歌の心を以つて、人目ばかりを憚り候ふものぞとこそ覚えて候へ」と歌の心を釈しければ、師直大きに悦んで、「ああ御辺は弓箭の道のみならず、歌道にさへ無双の達者なりけり。いで引出物せん」とて、金作りの丸鞘の太刀一振り、手づから取り出だして薬師寺にこそ引かれけれ。兼好が不祥、公義が高運、栄枯一時に地をかへたり。

〔注〕 ○兼好——兼好法師。『徒然草』の作者。

○紅葉襲の薄様——表は紅、裏は青の薄手の紙。

○薬師寺次郎左衛門公義——師直の家来で歌人。

○仲立ち——仲介役の侍従。

○小夜衣——着物の形をした寝具。普通の着物よりも大きく重い。

○十戒の歌——僧が守るべき十種の戒律について詠んだ歌。

○丸鞘——丸く削った鞘。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・エを現代語訳せよ。
- (二) 「わが文ながらうちも置かれず」(傍線部ウ)とあるが、どうして自分が出した手紙なのに捨て置けないのか、説明せよ。
- (三) 「さやうの心」(傍線部オ)とは、何を指しているか、説明せよ。
- (四) 「わがつまならぬつまな重ねそ」(傍線部カ)とはどういうことか、掛詞に注意して女房の立場から説明せよ。
- (五) 「人目ばかりを憚り候ふものぞ」(傍線部キ)とあるが、公義は女房の言葉をどう解釈しているか、説明せよ。

草稿用紙 (切り離さないで用いよ。)

第三問

次の文章は、宋の王安石が人材登用などについて皇帝に進言した上書の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

先王之為<sup>をさむルヤ</sup>天下、不<sup>シテ</sup>患<sup>ヘ</sup>人之不<sup>ルヲ</sup>為<sup>なす</sup>而患<sup>ヘ</sup>人之不<sup>ルヲ</sup>能<sup>ハ</sup>、不<sup>シテ</sup>患<sup>ヘ</sup>人之不<sup>ルヲ</sup>能<sup>ハ</sup>而患<sup>ニ</sup>己之不<sup>ルヲ</sup>勉<sup>ム</sup>。

何<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>患<sup>ニ</sup>人之不<sup>ルヲ</sup>為<sup>サ</sup>而患<sup>フト</sup>人之不<sup>ルヲ</sup>能<sup>ハ</sup>。人之情<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>願<sup>フ</sup>得<sup>ルヲ</sup>者<sup>ハ</sup>、善

行・美名・尊爵<sup>b</sup>・厚利也。而先王能操<sup>トリ</sup>之以<sup>テ</sup>臨<sup>ム</sup>天下之士。天下之士、

有<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>遵<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>治<sup>ム</sup>者、則<sup>チ</sup>悉<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>願<sup>フ</sup>得<sup>ルヲ</sup>者<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>与<sup>フ</sup>之<sup>ニ</sup>。士<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>已<sup>ム</sup>矣<sup>c</sup>。

苟<sup>シクモ</sup>能<sup>ク</sup>、則<sup>チ</sup>孰<sup>カ</sup>肯<sup>ヘ</sup>舍<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>願<sup>フ</sup>得<sup>ルヲ</sup>而<sup>シテ</sup>不<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>勉<sup>ム</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ラ</sup>才<sup>ト</sup>。故<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、不<sup>レ</sup>患<sup>ニ</sup>人之

不<sup>ルヲ</sup>為<sup>サ</sup>、患<sup>ニ</sup>人之不<sup>ルヲ</sup>能<sup>ハ</sup>。

何謂<sup>ヲカ</sup>下<sup>フ</sup>不<sup>シテ</sup>患<sup>ヘ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ハ</sup>不<sup>ル</sup>能<sup>ハ</sup>而<sup>レ</sup>患<sup>フト</sup>己<sup>ノ</sup>之<sup>ハ</sup>不<sup>ル</sup>勉<sup>ム</sup>。先王之法、所<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>待<sup>ラ</sup>人者、尽<sup>ス</sup>矣。自<sup>リ</sup>非<sup>ザル</sup>下<sup>ニ</sup>愚<sup>ニシテ</sup>不<sup>ル</sup>可<sup>カラ</sup>移<sup>ル</sup>之才<sup>ニ</sup>、未<sup>ダ</sup>有<sup>ラ</sup>不<sup>ル</sup>能<sup>ハ</sup>赴<sup>ク</sup>者也。然<sup>リ</sup>而<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>謀<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>至<sup>ス</sup>誠<sup>ニ</sup>。惻<sup>ソク</sup>怛<sup>ダツ</sup>之心<sup>ヲ</sup>力行<sup>シテ</sup>而<sup>シテ</sup>先<sup>ンゼ</sup>之<sup>ニ</sup>、未<sup>ダ</sup>有<sup>ラ</sup>能<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>至<sup>ス</sup>誠<sup>ニ</sup>。惻<sup>ソク</sup>怛<sup>ダツ</sup>之心<sup>ヲ</sup>力行<sup>シテ</sup>而<sup>シテ</sup>応<sup>ズル</sup>之<sup>ニ</sup>者<sup>ト</sup>也。故<sup>ニ</sup>曰<sup>ハク</sup>、不<sup>シテ</sup>患<sup>ヘ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ハ</sup>不<sup>ル</sup>能<sup>ハ</sup>而<sup>レ</sup>患<sup>フト</sup>己<sup>ノ</sup>之<sup>ハ</sup>不<sup>ル</sup>勉<sup>ム</sup>。

(『新刻臨川王介甫先生文集』による)

〔注〕 ○先王——古代の帝王。

○下愚不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>移之才——『論語』陽貨篇に「上知と下愚とは移らず(きわめて賢明な者ときわめて愚かな者は、何によつても変わらない)」とあるのにもとづく。

○惻怛——あわれむ、同情する。

設問

(一) 傍線部 a・b・c の意味を現代語で記せ。

(二) 「孰肯舍其所願得而不自勉以為才」(傍線部 d) とは、誰がどうするはずだということか、わかりやすく説明せよ。

(三) 「所以待<sub>レ</sub>人者尽矣」(傍線部 e) を平易な現代語に訳せ。

(四) 「不<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>至誠惻怛之心力行而先<sub>レ</sub>之、未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>能以<sub>レ</sub>至誠惻怛之心力行而応<sub>レ</sub>之者<sub>ト</sub>也」(傍線部 f) とは、誰がどうすべきだということか、わかりやすく説明せよ。



草稿用紙  
(切り離さないで用いよ。)

## 第四問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

有袋類は胎生であつて胎盤がない。そのために胎児は不完全な発育状態で生まれてしまう。カンガルウは受胎してから約四十日後には生まれるが、そのままでは育たないので、育児嚢のうという袋があつて、生まれた子供は多分自力でその袋の中にもぐり込んで発育を続ける。

これは動物学の復習である。どうして同じ哺乳類でありながら胎盤のない種類がいるのか。これは動物学では考えないことにしている問題である。それは専門を決めた学者にとつては、用心しなければならないわざあな事である。それに動物学の中でもこれに似た奇妙な例はいくらでも挙げられる。そして人間だけには、理解しにくいような奇妙な器官がないなどと思つてはならない。

鳥類は卵を産み、それを放つておけばふか孵化しない。それを抱きあためるために、鳥には抱卵斑ほうらんはんというものがある。そこには綿毛や脂肪がなくて血管が集まり、卵をあためるのに都合がいいように皮膚の温度が高くなっている。

その他、自分の子供を育てるために、また敵から子供を守るために、どれほどの配慮が行われているか、それらの書かれている動物の本は興味を持たれ、感動を与える。

親は自分の少年少女時代の感動を蘇よみがえらせて、ある機会にそれらの話を子供に聞かせ、動物の生活を書いた本を読ませる。人間はこうして教育の材料を見付け出すのが巧みである。それに効果も期待できる。

しかしお膳立アてのでき過ぎた与え方は効果が薄れ、時には逆の効果の現われる虞おそれもある。

それよりも、子供はある機会に、動物の生活の一部分に出会うことが必ずあると信じよう。その時には余計な口出しをしてはならない。たとい、いきなり残酷に見える行動に出ても、それも黙つて見ている忍耐を養つておかなければならない。自分が産み、

自分が育てている子供のことは、自分以上に知っている者はいないという自信は必要だが、自信は思ひ上がりに変貌しやすい。

親の眼に残酷に映る子供の行動には必ず何か別の意味が含まれている。残酷な行為だと親に教えられるよりも、自分からそれを感得する方がどれほど値打ちがあるかをまず考えることである。それが親にとつては一番難しいところかもしれない。

動物と子供との間には、特殊な対話がある。だが、それを題材にして大人が創つた物語にはかなり用心しなければならぬ。それらの大部分は人間性の匂い豊かな舞台で演じられた芝居のように書かれているからだ。シートンの『動物記』を子供に与えていいものかと躊躇している親は、この本をかなりよく読み、大事なところを読み落としていない。

ファープルは子供のような人であつた。昆虫の気持ちを知らうとしてしばしば奇立ち、プロヴァンスの畑の中で、時々残酷とも見えることをしていた。

動物をじつと見ている子供に、最初から何が何でも動物愛護の精神を期待したり、生命の尊重を悟らせようとしてもそれは無理である。蚤を飼育してみようと思ひ立つたある少年は、蚤の食事の時間を決めて、自分の腕にとまらせて血を与えた。その方法は自分の皮膚の最もやわらかい部分を毒虫に提供し、時計を見ながら何分後には虫が毒針を刺した部分がどんな変化を見せたかを記録しているファープルの思ひつきによく似ている。

この少年を動物愛護の模範生のように扱う人がいたら、その思ひ違いを嘲う。それよりも蚤を飼育する子供を黙つて見護つていた親を讃めなければならない。

親はしばしば子供に玩具の一つとして小動物を与える。愛玩用として選ばれたさまざまな小動物の多くは、その親子の犠牲になる。犠牲のすべてを救い出そうとする憐愍の情は、直接何の関係もない第三者が抱いて、それによつて批評をするものである。その批評に耳を傾けてみると、子供と動物との間での対話がどの程度大切なものを忘れてるか、さもなければ見誤つている。

対話という言葉もある雰囲気は持つているがそれだけにごまかしが含まれていてあまり使いたくない。玩具の一種として親は動物を与える。子供は掌に乗るほどの小型自動車と、一日中車を回転させている二十日鼠とはきちんと区別をしている。本来はどちらかを選ばせるということのできない別種のものである。小型自動車とは子供は対話をしない。そこまで言つと、子供がしてい

る小動物との対話の意味がそろそろ理解されてくる。人形に向って子供はよく話しかけるが、それは大人の真似まねに過ぎない。動物との大切な対話は沈黙のうちに行われているのが普通である。名前をつけてその名をよび、餌を与えたり叱ったりしている時は人形への話しかけと同じである。それは大した問題にはならない。

その、沈黙の間に行われる対話の聞こえる耳を持っている者は、残念ながら一人もいない。

(串田孫一『緑の色鉛筆』による)

〔注〕 ○シートン——Ernest Thompson Seton (一八六〇～一九四六)。アメリカの作家・博物学者。

○ファールブル——Jean-Henri Fabre (一八二三～一九一五)。フランスの昆虫学者。

○プロヴァンス——Provence フランスの南東部の地方の名。

設問

(一) 「お膳立てのでき過ぎた与え方は効果が薄れ、時には逆の効果の現われる虞れもある」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(二) 「人間性の匂い豊かな舞台で演じられた芝居のように書かれている」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「この少年を動物愛護の模範生のように扱う人がいたら、その思い違いを嘲う」(傍線部ウ)とあるが、なぜ嘲うのか、説明せよ。

(四) 「子供がしている小動物との対話」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

草  
稿  
用  
紙

(切り離さないで用いよ。)



